

【司会：瀧澤】

本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

私ども私学高等教育研究所での公開研究会もちょうど 40 回目ということになりますが、今日は、お手元の案内にも書いてございますようにテーマは「諸外国における第三者評価の動向」ということで、特にアメリカと韓国を取り上げているわけでございます。

ちょっと簡単に経緯を申し上げますが、ご承知のように認証評価が始まりましてから 5 回の評価をやったわけです。7 年のサイクルというのがあと 2 回で終わるという段階になりまして、これまでの経験に基づいていろいろ問題が出されております。そこで、いずれの評価機関でも、23 年度からの第 2 サイクルに向けて評価システムの検討、再検討を開始しているというように承っているわけでありまして。

ご承知のように、中教審でも、長期的な大学教育のあり方の諮問の中で、質保証システム部会というのを設けまして、かなり諮問全体の中心的な問題として検討を始めておられるわけでありまして。

そんな状況がありまして、日本高等教育評価機構、略して「JIHEE」と言っておりますが、JIHEE におきましても、モデルといたしておりますアメリカの第三者評価、ア Krediyatshon の動向なども、ごく最近はどういう状況であるか、特に重点は、アフター・フォローといえますかフォローアップのシステム、評価後の支援がどういう形で行われているかということを中心として調査をしてみましたわけでありまして。

それから、もう 1 つは韓国の調査をいたしました。韓国というのは大変にドラスティックな改革があるようでございまして、話題としては大変におもしろいお話があるのではないかなと思います。

そういうことで、今日はこの諸外国への調査団のメンバーによりまして報告会ということにさせていただいているわけでありまして、講師といたしましては、まずアメリカにつきましては、日本大学文理学部教授の羽田積男先生、それから、大学評価・学位授与機構の准教授をされております森利枝先生のお二人をお願いをしております。お二人とも、私ども私学高等教育研究所の研究員をお願いしている先生方です。

それから、韓国につきましては桜美林大学の大学院教授の馬越徹先生、既にご承知だと思いますが韓国の研究につきましてはまさに第一人者でありまして、恐らくは韓国の状況をわざわざ調査に行く必要もない方だと思います。電話一本でいくらかでも情報が取れるということだろうと思いますが、今回は調査に行ってこられまして、大変おもしろい興味深いお話を期待できるかと思っております。

それでは、まずアメリカのほうから、羽田先生にお願いいたします。よろしく申し上げます。

【羽田氏】

ご紹介をいただきました日本大学の羽田と申します。よろしくお願いいたします。

私が参りましたのはアメリカでありまして、今、瀧澤先生からお話があったようなそういう経緯でアメリカへ行ったわけでありまして、先生がおっしゃったように、そもそもフォローアップとは一体何なのかということは、実はあまり合意できておりませんでした。私ども調査団も、大体のイメージは日本語として、フォローアップというのはこんなことだろうというのは合意ができたのですが、しかし実際に何をやるのかということになると、あまり合意できておりませんでした。

そこで、私どもは2回にわたって議論をいたしまして、取り急ぎ4つのことを念頭に置いてインタビューしてこようということになりました。

それは、この認証評価機関からのアクレディテーションを得る上でのプロセスで、評価機関からいろいろ指摘された改善点、ここを改善する、あそこを改善するというようなものが必ず指摘されると思いますけれども、それに対する大学側の改善の進捗状況の把握の仕方がどういうものになるかということが1つです。

それから、アクレディテーションを済ませたあとで、例えば西海岸でありますとスタンフォードとかバークレーのような優良な大学は、大体10年間ぐらいの期間を認証されて、次の更新は10年後にやってくるわけですが、その更新した後のプログラムは何かあるのか、あるいはないのかということですね。

アメリカの6つある地域の認証評価機構は、全て大学をいわば会員としてもっていて、その会員大学の教育の質的な向上に、どういうふうに貢献をしているのかということも聞いてみようということです。

さらに、つまるところ大学とのコミュニケーション、あるいはサービスにはどのようなものがあるのかということです。

以上、4つのことを聞いてみようとしたわけです。

そして、私どもが伺った認証評価機構はこの4つの団体です（スライド3枚目）。1つの団体に2時間ぐらいということで、私どもは、様々なインタビューを立案してまいりました。

まず上の2つは、フィラデルフィアにある MSA、それからカリフォルニアにある WASC に、私と東京国際大学の高橋宏先生、それからこの日本高等教育評価機構から高山裕司さんと守屋秀之さんと4人で伺いまして、様々なお話を聞いてまいりました。

下の2つは、これからお話になる大学評価・学位授与機構の森利枝先生、それから桜美林大学の田中義郎先生、そして日本高等教育評価機構の伊藤敏弘さんと陸鐘旻さんと4人で担当いたしました。ボストン近郊の NEASC と、シアトルの NWCCU という団体に行くことになりました。

そして、もう1つ、今度は認証評価機関ではなくて、その反対に立っている大学についても行ってみよう、大学からの意見も聞いてみようというわけで、フィラデルフィアでは5つの大学が挙がっております（スライド5枚目）。

ただ、5つの大学は、初めから計画して挙がってきたわけではなくて、2番目のテンプルという州立大学ですね、日本にも分校を持っていますが、その大学にお願いしたときに、周りにある大学も糾合して1カ所に集まって、いろいろなお話をしたほうがいいのではないかという形になりましたので、フィラデルフィアでは少し変則的な形ですけれども、ドレクセルという大学でまとめてお話を伺いました。

それから、西海岸ではサンフランシスコ州立大学です。2番目は、サンタ・クララという大学で、これはイエズス会の大学ですから上智大学と同じような宗派になります。それから、3番目は、少し珍しい名前ですがコグズウェル・ポリテクニカル・カレッジです。今どきポリテクニカルというような古い名称ですが、100年以上の歴史があります。小さなカレッジで、100人ぐらいしか学生がいないのですが、そのような大学も大学なのかということで、そこも加えて行ってみりました。

さて、そのフォローアップとは何かという、今4つぐらいのお話をさせていただきましたけれども、特に今日は、西海岸の WASC (Western Association of Schools and Colleges) というところの話を中心にしたいと思います。

それは、私たちが伺った2つの認証評価機関、あるいはその近くに存在する大学のいろいろな話を聞いて、これは個人的な印象ではありますが、やはり WASC の評価の仕方が、秀でていると言えるかどうかはわかりませんが、とにかくほかの機関とは随分違っています。

そして、WASC に聞いてみますと、私たちは今「学習中心評価モデル」というようなモデルをつくり上げている、そしてそれはアクレディテーションのニューモデルをつくるのだということでありました。どうしてそんなことをしなくてはいけないのか、が当然のこと問われます。

実は、10 年ほど前にこの日本高等教育評価機構を立ち上げる際に、評価機構のさまざまな基準を考えると、私は早稲田大学の客員教授になっておりました喜多村和之先生、あるいは森先生もいらっしやいましたけれども、その方々と WASC に行って話を聞いてきたのですが、その当時から比べるとやはり大きく違っていました。

というわけで、非常に驚いて帰ってきたのですが、なぜそんなモデルをつくるかという、1 つのサイズの評価基準をつくってすべての大学にそれを当てはめるのは、問題だということです。カリフォルニアには3、4万人の学生を抱えている大学があり、なおかつオンラインの大学があり、さらにフォア・プロフィットつまり営利型の大学があり、たくさんコミュニティカレッジがあり、そして、先ほど申し上げたコグズウェルのような学生が100人ぐらいの大学もある。だから、1つの評価基準のやり方ですべてをやるのはなかなか難しくなっているのが、これはいわば統一見解といいましようか、理由を1つ挙げるとすれば、そういうことになるかと思いません。

それを少し細かく言えば、大学のタイプが非常に多様化してきたので、それに向き合うようにしなくてはなりません。例えば、オンライン大学が成長してきています。伝統的な大学においてさえも、現在は分校型のキャンパスの学生が大変に増えています。カリフォルニアの事情に詳しい方はご承知のとおりだと思いますが、カリフォルニアは現在、学生数が右方上がりでありまして、大学が足りていません。今やコミュニティカレッジでも、一年中やっています。土曜日・日曜日もやっているような状況になっています。したがって、伝統的な大学であっても分校で授業をすることが増えてきているので、これも1つの理由になります。

3番目の大学スケールと複雑さの増大に対処することについては今申し上げてきたことと同じですからこれはいいとして、それから、従来のようなインプット、あるいは資源を考えて評価する、その場合の資源というのは、お金だけではなくて人的資源など様々ですけれどもそういうものを超えてイフェクティブネス、パフォーマンス、そういう指標を取り入れて、教育の効果、学

習の効果というものをもっと前面に出していこうということでもあります。

それから、最近は卒業率ということに大変期待が高まっています。それは、もっと言うと、早く学生を出さないと次の学生が入学できないという事情もあると思いますけれども、これはもうカリフォルニアの学生の急増がありますので、そういうことになってきているのだと思います。

もう一方では、学生の学習に対する成果というものが測れるかどうか、エビデンスを入れて、つまり証拠を入れてそういうものを測っていこう、着目していこうという1つの理由であります。

もう1つは、学習者や学習ニーズが非常に多様化している。従来は、古い話でいえば、いわば白人の男性で18歳から22歳というのが大学生のイメージですけれども、それはもうほとんど変わってきて、今は18歳から22歳の大学生はどこにいるかというくらいに変わってきている。ですから、その多様性に応える。

あるいは、グローバリゼーションというものに応えていく。カリキュラムも非常に多様性を持っています。私どもが知っている従来のカリキュラムではなくて、インターンやワーク・スタディとか、さまざまなものが入ってきます。したがって、それも非常に広まっています。

そのようなことに対して新しいモデルをつくっていこうと、それがWASCの挑戦です。

それから、学生の大学間の移動、それから授業出席のパターンなども非常に変化している。例えば、オンライン型の大学であればもちろん学習は家でやるし、たまには教室に行ってやる。そういうふうなパターンも、非常に変わってきている。

また、授業料が非常に高騰してきています。高等教育がますます経済成長や生産性、そういうものに対して寄与していることがだんだんと明確になってきている。そんなこともあって、新しいモデルをつくろうと動き始めています。

もう1つ、これは理由としてはなかなかおもしろいと思いますけれども、大学のアクレディテーションを進めていくその過程では、非常にワークロードが大きくなり増えてきています。そういう増大するワークロードに対してもう少し何とかならないかというのも理由に挙げられておりました。

そこで、その新しいモデルは何かというと、1つは、学習中心のモデルを提唱しよう（スライド7枚目）。そして、特に2番目と3番目の学生の学習成果を問う、大学自体の学習への取り組

みを問う、この3つが基本的な構成要素だというふうに考えられます。

そして、現実に WASC ではステージ I・II・III という評価のサイクルがあって、私どもが、WASC のフォローアップとは何でしょうかと聞いたときに、この3つの段階で、それぞれ私たちは当該大学にフィードバックしているのです、それが意味においてはフォローアップに相当すると、こういう話でありました。

3つのステージというのは、まず第1のステージは大学からの評価申請です（スライド8枚目）。「プロポーザル (Proposal)」と言われております。そして、このプロポーザルを書くときには、当然のことですが、事前にワークショップがあり、大学のレップがそこに行っているいろいろな方法を学んで大学に帰ってくる、そしてつくり上げていく。そのプロポーザルは、本文 15 ページ以内で提出するというものです。ですから、非常にシンプルなものですね。大学の概要とこの下を書いてある4つのスタンダードを踏まえて書けばよろしいということです。

そして、それが済めばそれを提出していただいて、WASC からはそれに対するフィードバックがあるということになります。そこでは、最終的にいつ次のステップに入るかということ、18カ月以内に決めると書いてあります。

評価基準は、資料の括弧のほうを言いますが、(大学の目的、誠実性)、(教授・学習、学習支援、成功支援)、(教授・職員、財政・物理的・諸資源など) というもので、持続可能な組織をつくるように言っています。それから、(戦略的思考・計画、学習と改善への取り組み)、これが4つの評価基準です。

したがって、現在、私たちの日本高等教育評価機構の基準は 11 基準であります、これと比べると全然こちらのほうが統合的ですし、一目では何をやっていいかわからないところもありますが、インテグレートされているというふうに言っておりました。

2つ目のステージは（スライド9枚目）、ここを日本語に直すのは非常に難しいので、あえて英語のまま使っていますが、キャパシティ (Capacity) と予備的評価 (Preparatory Review) という、2つ目の段階であります。

そのことの説明はなかなか難しいので、資料を配布させていただきましたが、「1.」というところを見ていただきたいと思います。これは、右上のほうに UC RIVERSIDE と書いてあります

が、リバーサイドにあるカリフォルニア大学のアクレディテーション再認定のプロセスを示したものです。

一番上の項目に、2005年の10月にこのプロポーザルを提出して、そこからスタートしました。4つ目の項目に「Preparatory Review」、「Institutional Capacity」というものに対して、まず1回目の訪問調査が行われるというのが、2008年3月12～14日というふうに書いてあります。ですから、これが現在のステージⅡに相当するものです。

それから、最後の項目は、「Educational Effectiveness Review」というもので、この大学の場合は2009年10月に2回目のサイトビジットがあるということになります。

ここが、少し大げさかもしれませんが革命的な変化です。ほかの評価機関は、すべて1回の訪問調査、あるいは1回と言わなくても、それに付随する調査ですから、それほど丁寧ではないかもしれませんが、WASCは、この制度設計として2回、ステージⅡとステージⅢでやるというわけです。

そして、ステージⅠで15ページ、Ⅱで35ページ、Ⅲで50ページぐらい自分たちの自己報告書を書いて提出して、それに対して、1回目は日程等を決めるだけですけれども、2回目と3回目は直接訪問団が大学に行って、大学の報告書をもとに評価するということになります。現在、私たちの評価機構は、先生方もいらっしゃったと思いますけれども、2泊3日ぐらいで、2日間ぐらいフルに行ってやるのですが、これを2回やろうというわけです。

1回目のステージⅡのほうは、私たちがやっていることと比較的似ていると思いますが、ただ、この2つ目の①評価基準対応の総合型、②大学の選んだテーマ別の自己評価、このレビューというのは2つの方法どちらかで行う。つまり、WASCの掲げている4つの基準に沿った形でやってもいいけれども、自分たちが自由に選んだテーマでやってもいいというわけです。それを書きなさいというわけです。そして、自由に書くのですけれども、それはこのⅡとⅢのステージで両方とも評価されますので、きちんと考えて書くということです。

いずれにしても、ステージⅠ・Ⅱ・Ⅲがあって、それぞれWASCがそれをフィードバックするということになります。

ですから、私たちがお目にかかったのはリチャード・ウィンさんという方でしたけれども、ウ



インさんは、この3回のフィードバック、コミュニケーションは、私たちの言うところのフォローアップに該当するのだろうと言うわけです。ごくごく普通のアクレディテーション過程において、少なくとも3回の文書をもって、あるいは2回の訪問調査団が訪問して調査をする、そういうフォローアップがあるということが、非常に特徴的な WASC の方向です。

その「Capacity」という2回目の評価と、「Effectiveness」という3回目の評価は、ここ（スライド 11 枚目）に英語だけで書いていますけれど、教育効果のフレームワークというのは、これはⅡとⅢの段階で、実際はその4つの項目があるのですが、大学はそれを WASC のいわば書式に沿った形で書いていき、そして自分たちの今の進行具合はイニシャルの段階にあるのか、あるいは非常によく進歩を遂げた段階にあるのかということの評価をなさいというわけです。

A・B・C・D、この4つのクライテリア（評価基準）があるのですが、それに沿った形で全部自分たちが自己評価をしていく。そして、それについてサイトビジットのチームが評価をする、こういうことになります。

同じようなことが、資料「3.」に Rubric for Evaluating General Education のアセスメントということになっています。つまり、私たちのいうところの一般教育の評価を、そのクライテリアの欄を見ますと、アウトカムという、要するに成果を自分たちでどういうふうに評価しているかというのを書きなさいというわけです。

ですから、このⅡとⅢの段階では WASC の基準は柔らかく大きなものですが、小項目の基準が設けてあって、それに従って書いていくということになります。

サンフランシスコ州立大学のプロポーザルでは、先ほども言いましたように、4つの基準に沿って書いてもいいのだけれども、サンフランシスコ州立は、「いや、私たちは3つを選ぶ」と書いてありました。

何を言っているかということ、「社会的構成・公平、市民的取り組み」、「大学教授陣と学生のプロフィールを変える」、「21 世紀において学生の成功を促進する」と書いてあります（スライド 12 枚目）。私たちから言わせると、自己選択の3項目は、ぼやけているような感じがしないでもないと思うのです。

しかし、例えばこの2のところ、大学の教授陣をどういうふうに変えるか、学生のプロフィール

ルをどう変えるか。例えば、簡単にいえば、大学の教授陣に女性が少ないと思ったら、それをどう対応するかということです。また、学生のプロフィールも、この大学ではちょうど博士課程が始まったばかりで、従来のマスタープランでは、州立大学、カリフォルニア・ステーツ（CSU）は、博士課程が持てませんでした、それが持てるようになったので、したがってそれに対応して先生方のプロフィールも学生のプロフィールも変えていくというようなことです。

そういうことを2番目のステージⅡとⅢでうたい上げて、そしてそのⅡとⅢの間にいろいろなことをして、それを自分たちで評価して提出するということになります。

大学側の聞いた意見では、とにかくこの評価過程に関する学内の費用はもう大変で、サンフランシスコ州立では全体では20万ドルを超えていると言っていました。大変なお金です。

2番は学内の問題ですけれども、これはプログラム・レビューといいまして、2番目と3番目の中にある1つの項目なのですが、同じ大学の中でも情報収集はなかなか難しいとか、WASCの評価方法が大幅に変わってきて、新しいのに対応するのが難しいなど、さまざまな意見がありました。

特に4番目に注目してほしいのですが、学生の学習成果を評価するといってもなかなか難しく、場合によっては外部の調査機関などに委ねることが、部分的には必要ではないかということをおっしゃっていました。

サンタ・クララ大学も同じようにテーマ別の評価を選んで、「能力、良心、思いやりの形成」を挙げています（スライド12枚目）。思いやりの形成なんてどうして評価ができるのかという感じがしないでもないのですが、これはイエズス会のカトリックの大学ですから、大学のカラーを出すためにはそういうところを出していこうということだと思います。それから、教える研究者モデルをつくっていこうとか、さまざまなことをおっしゃいましたが、いずれにしても大学の特色を出して評価を受けようというわけです。

それから、意見のところでは、前回、これは2000年ですが、再認定の際にリコメンデーションを受けた部分について対応して記述しています。例えばこの大学の場合は、図書館のあり方をもう少し考えるようにと言われたのでそれを改善したということをおっしゃっていました。

また、先ほどのサンフランシスコ州立大学と同じですが、学習のアウトカムですね。これはや

はり民間の調査機関などを利用していこうということです。

そのイメージは、これはサンタ・クララ大学では、実は厚いブックレットを散々見せられたのですが、資料の「4.」を見ていただけますでしょうか。これは WASC からもらったサンプル資料ですが、これを見ますと、一応ビジネス会社のテストというものを使って、経年変化で当該大学のスコアがどういうふうに上がっていくのか、これを見ると、はっきり言ってみんな右方上がりで、こんなことがあるのかという感じがしないでもありませんが、こういうふうになっていくことが期待されているということです。

こんなことが本当に起きるかどうかわかりませんが、実際にサンタ・クララ大学でやっている外部調査団体のスコアを見せていただきましたけれども、確かにインプルーブしていると申しましょうか、右方上がりになっていることがわかりました。

そして、そのことは、一番下のほうの折れ線グラフのところですが、XYZ というのが当該大学だとすれば、アメリカのトップテンの大学は大体この 90% ぐらいのところをずっと推移している。

National Mean というのは、国全体の大学の平均値です。ちょっと見難いのですが、いずれにしても、他の大学と比べることができるようになっていきます。特にこの場合は同じアメリカのイエズス会の大学での自分たちの位置が分かるようになっていきますし、カリフォルニアのこういう総合大学、コンプレヘンシブ型の大学の中ではどの辺に位置しているのかというようなことが見て分かるので、便利と言えば便利だと言っていました。そのようにして現在は進んでいるように見えました。

これも同じことですが、今申し上げたこの表をどういうふうに次のステップに位置づけるか、結びつけるかというのが課題だということでした。

最後のこの小さな大学ですが（スライド 14 枚目）、学生数が 100 名ぐらいで、デジタル・コンテンツ、デジタツ・アーツというようなものを中心とした工科系の大学ですが、この大学の場合は、いわば経営難に陥りまして、その経営を建て直すために 3 分の 2 ぐらいの理事を入れ替えました。多くはアジア諸国のデジタル関係の企業の中から幹部を引っ張ってきて理事に据えて、そして経営を立て直した、そういう戦略のように思いました。そうすると、これは非常に大きな変

更ですから、WASC がこれに関与いたします。

それで、大学の意見としては、WASC のこの新しい評価システムはこういう小さい大学には非常に有利であります。なぜなら、先ほど申し上げたとおり、WASC は、ひとつの評価のスタイルがすべてにはフィットしないということを言っているわけですから、小さい大学でもフィットできるようにしているということで非常にありがたいというわけです。

それから、「Capacity」と「Effectiveness」の間で、私たちにとっては学生の学習成果というものが示しやすいと言っていました。デジタル・コンテンツなどを教える大学ですから、学生がそういうものを創って、それを電子アーカイブスに入れておいて、経年変化で彼らの進歩が示せる。

ただし、学生の学習成果というようなものを持ってこられて引っ張っていくと、評価対象地域の域内の大学全体がそちらの方向になびいてしまって、WASC がすなわち大学のコントローラーのような存在になってしまうのは少し問題かなと言っておりました。

そして、これはプラスの評価でしたけれども、WASC にはさまざまなカンファレンスがあるのですが、それは人々の集まりであって、自分たちには非常にありがたい。小規模大学とか弱小の私立大学にとっては大きな存在だということです。

これも、ARC と言いまして、WASC のカンファレンスには、4年制の大学と2年制の大学の関係者を一緒に集めて自由に議論する、そういうカンファレンスがある。あるいは、学長だけのカンファレンスがあるとか、さまざまなものがセッティングされていますから、それゆえに、こういう小さな大学でも、新しい方向は危惧もあるけれども、ありがたいというような話でありました。

終わりにもう一度復習したいと思いますけれども（スライド15枚目）、要するに「学習中心評価モデル」というものを志向していこう、ワンサイズはすべてにフィットしないのですから、これからそれに決別していくということです。

また、アウトカムを検証するためには、2回のビジット制を導入していこう、これはもう既に進行中です。

大学のプロポーザルには、大学の得意な分野、あるいは、大学の個性・特性が発揮できるよう

なものを書いていただいていたということなのです。

評価過程を通して大学とのコミュニケーションを図る。コミュニケーションですから、これは場合によってはフォローアップというふうに読みかえてもよろしいかと思えます。

しかし、考えてみると、最初のところから評価全体の過程は5年間くらいかかる。そういう長期の評価過程で、なおかつ、例えば10年間の認証評価認定の期間をもらったとしても、次の10年間に途中でまたいろいろなものが入ってくるということになりますから、ある意味では年がら年中コミュニケーションが必要になってくるだろうと思えます。つまり、フォローアップは常にコミュニケーションの中にある。

そして、最後に、私たちが日本高等教育評価機構で2巡目をどうしようかと考えているときに、評価基準はどうなのか。ここでは、WAWCは、明らかにこれは統合化しております。先ほど最初のほうで、第1の基準で大学の目的などがありましたけれども、そこに「インテグリティ」という言葉が使われていて、私たちの評価機構は「社会的責務」と訳しましたけれども、誠実性というようなものもそこに入れてやっっていこうということになっています。ですから統合化された評価基準を使っているわけです。

それにもかかわらず、評価の小さな項目については、インディケーター、あるいはリ्यूブリックという言葉も使われていたと思いますが、そこはかなり詳細に書かれていて、それに従って大学にレポートを求めているということになっていると思います。

したがって、WASCの評価のあり方は、これから森先生がお話くださいますけれども、アメリカ全体でいうと、必ずしもアメリカの代表とはいえないかもしれませんが、ひとつのあり方であることは間違いないので、多分全体として見れば、もしかしたらこういう方向に行くのだらうと思えます。ということは、私たちの評価のあり方もこういう方向に動いていくのではないかなと考えております。

以上、非常に急ぎ足で恐縮でしたけれども、WASCを中心とした私の報告にしたいと思えます。どうもありがとうございました。